白山手取川ジオパークに伝わる伝説

白山手取川ジオパーク推進協議会　近藤　綾子・メイ　スーザン

白山手取川ジオパークでは、活動開始当初より、伝説や民話などをジオパークのストーリーに関連づけながら伝えてきました。今回は、その中からいくつかを、伝説・民話の原文と現在の視点による解釈について紹介します。
※赤字が現在の視点で解説する伝説・民話の部分

1　千蛇ヶ池（せんじゃがいけ）

白山を開いた泰澄（たいちょう）とおろちの話です。昔、白山の山の上にはたくさんのおろちが棲んでいました。その数は、三千匹ともいわれていました。おろちは、ふもとの村々まで下りてきて畑を荒らしたり家畜を襲うなどの悪事を働いていました。おろちの悪行を知った泰澄は、すべてのおろちを集めてさとしました。ところが、どうしても言うことを聞かないおろちが千匹いたので、泰澄はこの千匹を一カ所に埋めて、その上にたくさんの石を積み上げました。これが弥陀ヶ原の近くにある蛇塚（じゃづか）です。残った二千匹のうち、千匹には刈込池に棲むように言いつけました。そして池の近くの大岩の上に大きな剣を立て、その影が水に映るようにしました。鉄に触れて体が腐るのを恐れたおろちは、池から出てこなくなりました。
次に残った千匹には頂上に近い池に棲むように言いつけ、すべてのおろちが池に入ると、その上から万年雪でふたをしてしまいました。そして雪がとけて蛇が池から出てきそうな時には、池の上にある「御宝庫（おたからぐら）」が崩れ落ちて池のふたとなるようにしたということです。この池を千蛇ヶ池と呼んで、今でも解けることのない雪の下におろちがいるといわれています。
（出典　白山比咩神社ホームページ）

千蛇ヶ池と万年雪

白山は、奈良時代の僧、泰澄が 717 年に開山しました。泰澄にまつわる伝説はたくさん残されており、その中の一つに、白山の三千匹の蛇（おろち）を鎮めた話があります。その話の一部には、現在の視点から見ると地球科学的な現象にあてはまる部分があります。現代では地球温暖化の影響で必ずしもそうとは言えませんが、歴史的には、千蛇ケ池の雪は万年雪で一年中溶けないとされてきました。つまり、その万年雪が溶けるのは白山が噴火する時であると考えられます。

白山の山頂付近に千蛇ケ池という火口湖があります。実際に、千蛇ケ池の上には崖があり、その崖に大きな岩（御宝庫：おたからぐら）があります。白山が噴火する際には、地震によってその岩が落ちてくる可能性が高いと考えられます。

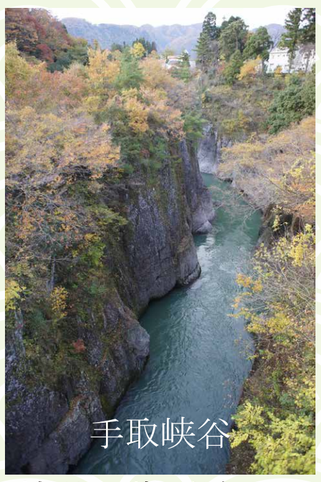
当時の人は、噴火のことを理解していたのでしょうか？

それとも、たまたま想像したことなのでしょうか？

2　弘法池（こうぼういけ）

昔、平安時代初期の高僧で真言宗の開祖である弘法大師空海が釜清水に立ち寄られ、老婆に水をわけて欲しいと頼まれました。老婆は険しい谷道を降りて、手桶に水を汲んできて、弘法大師に渡しました。弘法大師は老婆の親切を喜ばれ、錫杖の曲がった部分を岩に突き刺して、ぐりぐり回しました。すると、穴の底から勢いよく清冽な水が湧き出し、溢れ出しました。村人はたいそう喜んで、この池を弘法池と呼ぶようになったといいます。
（出典　2004年　続鳥越村史）

ポットホールから水が涌いている



峡谷の崖が険しい

この話は、現在も見られる自然の風景を表しています。

手取川は人々が暮らしているところより約 30m深くなっている手取峡谷を流れているため、水を汲む時には下りていかなければならず、水汲みは大変な作業でした。

峡谷の上は、昔、川が流れていた河岸段丘になっていて、そこを流れていた川の中にはポットホールがところどころにありました。ポットホールは、小さな石が川の底の石のわずかなくぼみに入り、そこで水の流れによって動くことでくぼみを削り、丸い穴になったものです。たまたま、弘法池はそのポットホールの一つから湧いています。昔の人はその穴を見て、“ぐりぐり”と何かで削られたように見え、弘法大師が杖で削って穴をあけたと考えたのだと思われます。ポットホールはいくつも見られますが、底から水が湧いているのは弘法池だけで、大変珍しいため、当時の人は自然現象と理解できずに、魔法のように考えられたのではないでしょうか。

紹介する伝説・民話のある場所